

(2) 「次の一步へ」

6年間を思い出しながら、思いつくままに書いてみようと思いましたが、頭に次々といろいろなことが浮かんでくると、何を書いたら良いかわからない、ということがよく分かりました…。それほど、この6年間は濃かったということでしょう。1年365日、HANDSと無縁だった日はほとんどなかったと思います。

前身を含めればほぼ10年続いてきた事業ということになります。児童と生徒の区別も良く分からない手探りの段階から始めました。確実に言えることは、外国人児童生徒の学習や進学を支援したいと願う実に多くの人に支えられて、HANDSは成り立ってきたということです。HANDSという名称は、様々な立場の人が手と手を取り合って進めて行こうという気持ちを込めてつけたものです。どれほどの人と出会ってきたのか。例えば、「多言語による高校進学ガイダンス」参加者549人、学生ボランティア派遣

学生161人、「グローバル化と外国人児童生徒教育」受講者535人、「外国人児童生徒教育推進協議会」参加者235人、「外国人児童生徒支援会議」参加者358人（いずれも平成22年度から26年度までの5年間の実績）という数字をみながら、様々な人の顔と場面を思い出しています。

・・・と、ここで頭を切り替えて、前を向くことにします。文部科学省特別経費プロジェクトとしてのHANDSは終了しますが、HANDS自体が終わるわけではありません。余韻に浸っているわけではありません。形は変わりますが、HANDSの精神を胸に次の可能性を摸索したいと思います。大好きな歌手の最近の歌の一節より・・・「昨日までの道、昨日までの愛に、別れの言葉を贈って、歩き出そう、夜を越えて・・・」

これまでお世話になったすべての方に心より感謝申し上げます。「次の一步」へ進みたいと思います。また違った形での出会いを楽しみにしております。

第3回 外国人児童生徒支援会議報告

— 18回目の支援会議 —

宇都宮大学国際学部特任准教授

若林 秀樹

1月25日、県内の外国人児童生徒教育拠点校担当教員をメンバーとする、HANDSプロジェクト「第3回外国人児童生徒支援会議」が開催されました。年度末が近い時期にもかかわらず、学校現場の教員や支援員、計33名の方々に参加していただきました。参加いただいた方々、そして、ご協力いただいた各校に対して、あらためてお礼を申し上げます。

平成22年度に発足したHANDSプロジェクトは、この3月で6年を終えます。プロジェクト事業費である、文部科学省の予算編成の変更などを受けて、HANDSプロジェクトの各事業は、

4月からある程度の見直しが必要とされていて、外国人児童生徒支援会議もその例に漏れません。言わば一区切りとも言える18回目の今回は、外部講師を招いて開催しました。

この日の講師としてお招きした、とよなかJSL代表の田中薫さんは、中学校教員として長く外国人生徒の教育に携わり、大阪だけでなく全国的に有名な指導者です。また、教員退職後に出版された著書、『学習力を育てる日本語指導』（くろしお出版）は、学校現場で広く活用されています。

田中さんを招いたのには、私なりの理由があ

りました。私が、中学教員として、外国人生徒の効果的な指導についての情報に渴いていた頃のこと。私は大阪で活躍する田中さんの講演があると聞き、愛知県まで出掛けました。そこで見聞きした圧倒的な実践記録や、語りによって伝わってくる熱意は、その後の自分を決定づける一部となりました。私は、栃木の1人でも多くの教員に、あの高揚感を体験してもらえたらと願いました。

講義中の参加者からは、田中さんのパワーに圧倒されながらも、思い思いにメモを取るなど、真剣な様子が見えかけました。この講義を契機に、1人でも多くの参加者が、この分野を切り拓く力になって欲しいと思いました。また、後日メールでおこなったアンケートでも、有意義な講義だったという意見が多く寄せられ、とても嬉しく感じました。

ここから、少し私感を交えながら、支援会議の6年間を振り返りたいと思います。中学校現場で外国人生徒の指導をしていた私は、なかなか整備が進まない支援体制にじびれを切らせ、「学校の外側から挑戦しよう」と決心し、大学に身を移しました。それからの6年間は、教員向けの指導マニュアルを作らせていただくことや、この分野で活躍する様々な人たちとの交流を通して、自分自身の知識や考えを広げることが出来ました。

しかし私はいま、「外からではなくて、内側から変わろうとしなければ、本当の力は得られない」という、一つの結論を持つに至りました。これは、もし学校現場の改革を求めるならば、学校現場の内側から変わろうとしなければいけないことを意味します。それならば私は、昔の私のように、進まない支援体制にもがいている現役の教員にとって、私は力になることができたのでしょうか。自問すると、課題や反省ばかり思いついて、やりきれない気持ちになるのが現状です。

私は機会があるたび、「外国人児童生徒に対する支援は、外国人だけのためではない」と言う

メッセージを発信しています。言語や文化、ときに肌の色さえ違う、言わば周囲から見て異質な子どもの成長を、学校全体で共有することは、受け入れる日本人の子どもにとっても、大切な教育活動になるからです。ますます多様化が進む社会において、これからの学校現場は様々な要求に応える義務を負っています。その点において、日本人の子どもと外国人の子どもが、共に成長しあう学校を作ると言う視点に立つことは、教育にとって新たな希望と言えるに違いありません。

支援会議は、日本語教室担当教員という、「特別な先生」を対象とした研究会でした。しかし、これからの学校は、すべての教員が、外国人を含む、多様な子どもを指導するスキルを持たなければなりません。そう考えれば、「特別な先生」が集まる研究会を発展させることよりも、すべての教員スキルを得られる体制作りのほうが大切になります。

支援会議の6年間は、細かい課題を残しながらも、栃木の日本語教室の先生たちが一つになるための、有意義な取り組みだったと信じています。この次は、支援会議の実績を生かし、すべての教員にとって、外国人児童生徒の教育が身近になるための、体制作りを目指したいと考えています。

